

差異のレトリック『アブサロム、アブサロム！』 における貨幣と資本主義

阿部 宏之

大恐慌を境にして30年代以降、金本位制が解体し管理通貨体制に移行する時代背景のもと、1934年2月頃書き始められ、1936年1月に完成したフォークナーの小説『アブサロム、アブサロム！』⁽¹⁾は、旧約聖書のダビデ王一族の、近親相姦と兄弟殺しの物語に準えて題名を得ている。確かに兄弟殺しという点では共通しているものの、小説において近親相姦はなされなかったのであり、それを防ぐ理由に、純粋な種の存続というレイシズムの論理があったことを看過してはならない。この点に限っても、素材として同時代の社会的言説が利用されている可能性を察知することができる。同時に、フォークナーが執拗にこだわり続けた近親相姦の問題に、神話的な次元しか読み込まない批評がいかに不毛なものかがわかる。

19世紀の経済は、結局のところ、金貨幣あるいはインゴットとしての金という中心に収斂し、そうすることで経済体系は安定的秩序を保つと信じられてきた。金本位制が経済的現実の原理的地位にあるかぎり、財の貨幣上の表現（価値）は金銀という素材貨幣によって表象されるという確信があった。この小説の1820年前後から1910年までの物語内容には、金本位制が崩壊して通貨と金との兌換が不可能になる事態の先取りがある。非兌換制下の貨幣は、19世紀の金本位制の立場から見れば、贖物の貨幣でしかない。そうした事態は、1930年代以降に世界経済の常態となる。アブサロム役である息子の、父に対する信念体系が崩れ、家出という形での反逆を契機とする一族の解体の物語は、家族の秩序の中心であり、経済における「一般等価」と同じ位置にある父と、経済的金貨幣が崩壊したことがパラレルであったことを暗示するのではないだろうか。

奴隸制に基づくアメリカ合衆国南部のプランテーション経済体制とその歴史の典型的な縮図を描いた、と評価されてきたこの作品のどこを探しても、貨幣問題への示唆、資本主義的要素など見当るはずもないと思われるかもしれない。本論はサトペン一族の物語、特に主人公サトペンの一生の軌跡に、いかに貨幣及び資本主義的概念が巧みに応用されているかを探る。ひいてはそのアナロジーを用いることに

よって、イデオロギー批判の視座からの解説を試み、南部のある名門家系の没落が
いかなる思想のパラダイムの中に位置づけて解釈されているかを考察する。

フォークナーは作品の中心人物は誰かという質問に、それは「息子を望んだところ、
息子が多く出来過ぎてしまって、彼らに滅ぼされてしまった男サトペンである」と答えている⁽²⁾。作品中では、サトペンの子供にギリシア伝説の「カドモスの竜の歯」のように次々に生まれてくる落し子、という隠喩が使われているが、それが含意するところは、四人の子供のうち南軍戦士となった二人の息子が互いに殺し合い、それが祟って彼の一族が運命の呪いを受けて滅びる、という筋立てであり、作者の言葉を裏付けていると言えよう⁽³⁾。「作者」は必ずしも自作の良き解説者であるとは限らないため、この言葉をそのまま信用し、かつ特権化することはできないが、ここにサトペン物語の骨子が示されていることは疑問の余地が無い。第一の「自己物語世界的」語り手ミス・ローザと、大半は推測に過ぎない第二のコンプソン氏の語りの上に、さらに第三の語り手クウェンティンとシュリーヴが共同で再構築するその物語とは、貧乏白人から成り上がり、大農園と名門の家系を築きあげ、その始祖となり「純粋な」白人の血統を世襲により永続させることを唯一絶対の人生の目的とした男の物語である。言い換えれば、「サトペン」の名を末代まで伝える自己複製の欲望に憑かれた男の物語である。

ヴァージニア山中の男性中心原始共産コミュニティから、1820年前後の「タイドウォーター景気」(222)に際し、海岸地方の南部社会に踏み込んでみて初めて少年サトペンは、貨幣及び土地の所有という概念に目覚める⁽⁴⁾。そこで彼が目当たりにしたものは、プランテーション経済を支えている、人間が生身の人間を財産として所有できる奴隷制度、人間の土地所有、貧富の差、黒人の存在であり、また自分が黒人奴隷以下の状況に置かれた貧乏白人階級に帰属することを悟り、黒人が自分を「嘲笑」するのではないかという怯えに憑かれる。「サトペンのデザイン」と称される彼の野望は、「ブア・ホワイト」の出自である彼がこの少年時代、プランターの白亜の屋敷の玄関先でその使用人の黒人召使（即ち商品としての奴隷）に、にべも無く裏へ回れと侮辱された原体験を動因としている。黒人召使の「にたにたした風船王」のような顔は、サトペンの終生のトラウマとなる。以来彼は、自分と家族を「獣」「畜生」同然だとみなし、自分だけはこの状態を脱し、奴隷としての黒人を支配するプランターの地位を獲得することを至上命題とするに至る。

プランターの「巨大な白亜の屋敷」購入と「子孫繁栄の夢」に憑かれて、「賢く勇気があれば金持ちになれる」(242)という思い込みのもと、西インド諸島ハイチへ渡り大砂糖農園の監督をする。黒人奴隷の暴動に際して「黒人には絶対に持つことのできない不屈の魂を持った白人」(254)の男らしさで破格の力量を発揮し、黒

人暴動を鎮め、その裕福なプランターの一人娘の婿に迎えられる。反乱した商品とも言える黒人奴隷に対して、サトベンが発した（と第三の語り手が推測する）「おれの腕や足や血や骨は、おまえたちのより立派なのだ」という言葉は、以後彼が黒人と事有るごとに執拗に繰り返される。ここには、黒人達が何故必死の反乱に起こ上がったのかについての説明が欠落している。また、随所で黒人が野獣以下の残虐な野蛮人であることが、人間ならぬ「猿」「獣」と形容されて、四人とも身分のある白人の語り手によって繰り返し強調される。これは南部・北部を問わず、黒人を商品化するイデオロギーを無意識に受け入れている白人大衆からみれば、むしろ自然なことであろう。その初婚で男児をもうけた時、彼のデザインは首尾よく達成されるかに見えた。しかし、生まれた息子に、したがって妻にも黒人の血が微量に流れているという疑惑が生じ、二人は自分のデザインに合致しないとして、充分以上の慰謝料と財産分与をして離縁する。南部の町ジェファーソンで出直すことになるが、ハイチでの二十人の奴隷という動産以外何も持たないサトベンは、早急に利潤を生み出すため詐欺、ペテン、泥棒、掠奪等の不等価交換に訴える。第一に、無知なインディアンを酒に酔わせて百平方マイルの土地を詐取したこと。第二に、屋敷の家財道具（舶来品）や船荷証券への大口の投機など密輸に手を染めていたらしいこと。第三に、屋敷建立のためフランス人建築家を二年間無償で強制労働させたこと、等が具体例である。彼の所有する大量の物品を考えれば、二挺拳銃でミシシッピ河の蒸気船を荒らし回ったという噂も根拠の無いものではない。犯罪容疑で一度は逮捕されもする。彼は、自分を逮捕した保安官をその息子をプランテーションの管理人にすることで懐柔する。保釈証書にサインしてくれたコールドフィールド氏の娘との二度目の結婚で、純血の白人の後継者たる一男一女ヘンリーとジュディスを得て、綿花ブームに乗って隆盛し間もなく郡最大の農園主となる。ところが、家督を正嫡ヘンリーに譲り渡そうという間際に、三十年前に捨てた子供チャールズ・ボンが認知を求めて、しかもヘンリーの大学での唯一無二の親友として突然現われる。皮肉にも、ボンはジュディスの婚約者にもなってしまう。彼が認知を拒絶し続けた結果、ヘンリーは長子相続権を捨ててボンと共に出奔し、そのまま南北戦争に出征する。敗戦間近にサトベンから真実を聞かされたヘンリーはボンを殺し、行方を晦ましてしまう。敗戦により大農園の土地は没収され、「動産」であった黒人奴隷は自由の身になりいなくなる。こうして白人の息子を失ったサトベンは、再度のやり直しを強いられて老いのあがきをする。身近な女性ローザを利用して当初の目的を果たそうとするが失敗し、相棒のウォッシュの孫娘ミリーを孕ませたが、再び息子に恵まれることはなかった。最期は、自らもその出自であるプア・ホワイトのウォッシュに殺される。

サトベンの一生涯の軌跡は「貨幣の無限の自己増殖をその目的とし、利潤の獲得をその動機としている資本主義」⁽⁵⁾の運動と酷似している。イデオロギーとしての資本主義は、アダム・スミス以来の「見えざる手」の働きによって調整される自己完結したシステムである。社会主義の基本的な考え方は、「見えざる手」の働きは不完全で恐慌や富の不平等が生じてしまうのを防ぐために、それを国家の「見える手」に置き換えることによって資本主義の自己完結性を合理的なものにできる、というものである。しかし、現実の資本主義とは、差異を媒介とすることで利潤を生み出す自己完結しないシステムである。この世に何らかの差異があるかぎり、それを食い物にして動き続けていく。ほとんど全ての人間の活動を、そのメカニズムの中に翻訳して巻き込んでしまう力を持っている。万物を購買できる貨幣が、自律運動を開始し、生産手段と労働力を買って生産過程を統治し始める時、貨幣は資本となる。白人である奴隷主は、支配者の地位が維持されている時、自ら資本と化していると言えるだろう。資本は資本を生む。「貨幣そのものを増大させる利子(ギリシャ語では子を意味する tokos)」⁽⁶⁾のように、サトベンの名を持つ子孫は等比級数的に増えていく。サトベンのデザインの根幹を成すのは、文字通り子宝に恵まれて、貨幣である純血の白人の息子を自己増殖させることによって、プランテーション体制維持のもと子孫繁栄を極めること、即ち資本に変化させるという利殖の術なのである⁽⁷⁾。第三の語り手はこれを、老いたアブラハムがすっかり衰弱し、もう何も悪いことができなくなって「首領」と「収税人」に捕まって弁明するという仮構を用いて比喩的に表している。老いたアブラハムとはサトベンのメタファーである。

わしが息子をどっさり作ったのは、わしがしてきた数々の不正と迫害の精神的重荷を肩代わりしてもらいたかったからだ。そうだ。さらにわしの羊や牛の群れを強奪者の手から取り戻してもらったためだ。これでわしも自分の家具、家財、動産のいっさいと、末代まで絶えることなく幾百層倍にも増えるであろう子孫達に安心して目を注ぎながら成仏できるというものだ。(325)

貨幣が自己増殖していくためには、それは常に利潤を生み出していかねばならない。そしてその利潤とは「価値体系と価値体系との間にある差異から生み出される。互いに異なった二つの価値体系の間を媒介して、一方で相対的に安いものを買い、他方で相対的に高いものを売る——それが等価交換のもとで利潤を生み出す唯一の方法である」⁽⁸⁾。奴隷制大農園経営の場合を理念的に考察してみよう。黒人の価値体系とは、黒人の労働力と必需品との交換比率であり、そこでは奴隷主は黒人の労働力を安く買う。奴隷に生活財を現物で供与し、酷使し過ぎると採算がとれな

いので、一定の給養水準を保ちながら生産活動に従事させる。白人の価値体系とは、生産過程における労働力、原材料及び生産手段（それらの維持・補填の費用も含む）と総生産物との間の変換比率を意味する。奴隷主は総生産物をそっくり取得して換金するので、生産過程でかけた費用を差し引いた残りが彼の純益である。彼が純益を大きくすることが高く売ることである。この二つ目の価値体系は、白人である奴隷主にのみ開かれたものである。その所有物であり、身分的にも隷従し、主人を選ぶこともできず、自らの労働力のみを売って、鞭の恐怖のもとに強要されて働く奴隷に対しては全く閉ざされたものなのである。支配者であり生産手段を所有しているが故に、二つの価値体系に同時に接触できる奴隷主は、それらの間に存在する差異を利潤という形で搾取することができるのである。ここに剰余価値が発生する。奴隷主は、奴隷の「必要労働」相当分を現物支給し、「剰余労働」の分を利益として取得して、自分と家族の生活財・奢侈財に当てる他、拡大投資・拡大再生産のファンドに当てる⁽⁹⁾。

サトペンとその名を持つ彼の子孫が、二つの価値体系の間の差異を利潤として搾取し、無限に発展していくこと、言い換えれば、貨幣（純血の白人の息子）を自己増殖させ資本に転化させ続けていくためには、人種間の差異と優劣関係が確保・維持されていることが絶対要件である。目に見える人種の差異、即ち人間／非人間の切断線が維持されている限り、名門サトペン家とその大農園の永続というデザインの成就が可能となる⁽¹⁰⁾。サトペンのデザインの資本主義的拡張運動は、それを大前提として初めて、駆動力を得て永久に自動運動していきけるのである。厳密に言えば、サトペンが「自分の（二十人の）野蛮な奴隷を隣人達の女奴隷と交わらせたこと」（61）から、彼の貨幣の無限の自己増殖は着手される。奴隷制度下では、黒人はその生身自体が一定の貨幣に換算される故に、その繁殖による増加分はサトペンの利潤になる。彼がメンフィスの奴隷市場でしたように、黒人の労働力も商品化して売買され、やがてより大きな貨幣となって回収される。但し、商品の役回りは、資本が雪だるま式に膨らんでいくのをただ助けるだけの媒介項に過ぎない。サトペンの金銭的貪欲さは、「自分が生ませた子供と、あの野蛮な黒人達がこの国の住人と融合して生ませた子供達全部に、自分で名前を付けた」（61）という、名付け＝刻印の欲望から見て取れるであろう。刻印とは、元来（それは紀元前七世紀後半のリディア王国であるかもしれないが）君主自らの印章であると共に、純度と額面価値を保障するものである。

検討すべきことは、人間を貨幣とみなし、白人の純血というフィクションに地金としての意味付けをして、金銀の本位貨幣（白人の子孫）及び他の実物資産の総計が王国の富を形成しているというサトペンの了解が、その語り手の白人男性に共

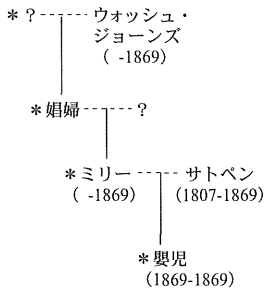
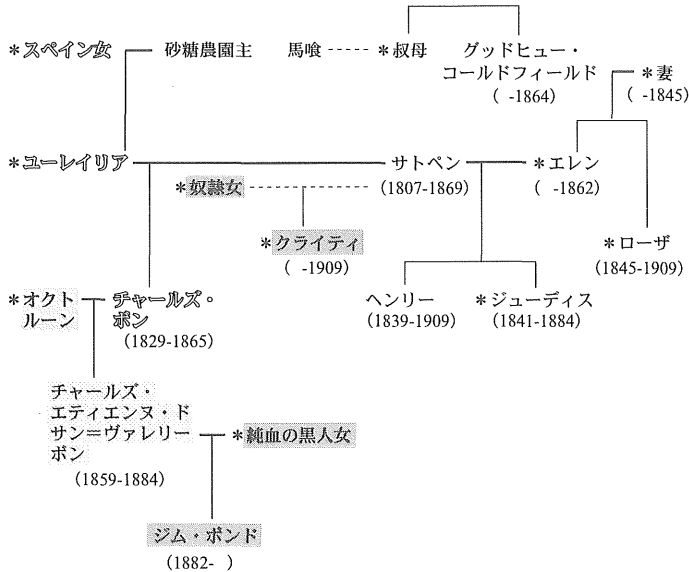
有されたものであるという問題である。問題の核心に触れるためには、人種の差異に及ぼすイデオロギー作用に照準を向けることが捷徑である。それは、本物（良貨）と贗物（悪貨）の選別をし、サトベンの系図の意味を解釈し、殺人事件の謎解きを行なうのである。

歴史上の事実を指摘するならば、サトベンの出身地、「新大陸」でイギリス最初の植民地となったヴァージニアに、西インド諸島から労働力として20人のアフリカ黒人が初輸入されたのは1619年であり、1661年に当地で奴隷制度が法制化された。その翌年に、ヴァージニアの植民地会議は「子供は母親の身分と同一とする」ことを法制化した。一滴でも黒人の血が流れていれば黒人であるという法則のもと、混血児は黒人に分類される。奴隷主と黒人女との間に生まれた子供は、全て「黒人」として売買できることを植民地会議は取り決めたのである。黒人奴隷女を性的玩具にしたり、情婦にして子供を産ませることを正当化したのである。白人主導型の体制で、白人男性がそうしたことを行なっている事実は、何ら恥じたり良心の咎めを感じたりする必要が無い当然の事で、彼が白人淑女と結婚する際に全く問題や障害になるものではなかった。この法と慣習下においては、白人と黒人の交婚は許容されない絶対的なタブーとする規準が定められる。白人と黒人の性関係は、必然的に白人男と黒人女のそれとなり、混血の子供は当然女親の側から「黒人の血」を受け継ぐ。小説の第六章以降では、混血児は女親から黒人の血と共に負の性質を遺伝的に受け継ぐという意味付けが展開される。「父譲りのところは全然無く、全て母から受け継いでいた」という言葉が執拗に繰り返される。まるで、黒人の血と悪、墮落、狂気とは密接不可分だと言わんばかりに。

白人が、黒人は人間以下で奴隷として創り出されたという人種観を基盤にして奴隷制を擁護するなかで、その「動産」である奴隷は、いくらでも「再生産」されていくことになった。「聖書に、神に創られ、またその呪いを受けて獣となり、あらゆる白人の奴隷となった、と書かれている黒人」(282)という第三の語り手がウォッシュに言わせた言葉は、創世記の第九章と第十章の「ハムの呪い」の神話に根拠があり、白人はこれで自らの人種的偏見が聖書で是認されたものであるとの信念を確かめている。ハムの子孫＝呪われた存在＝黒人。この神話の意味付けには明らかに論理的飛躍がある。しかし、黒人の劣等性と白人を種雑化から守らねばならないことを証明する権威ある資料としてこれは用いられ、もはや常識化しているのである。

クウェンティンとシュリーヴが推測する、「気が狂った女百万長者」(300) ボンの母親お抱えの、「金目当ての墮落した」(310) 弁護士が、サトベンの動向を逐一探り書き留めていた秘密の書類からは、サトベン・プランテーションの急速な経済的成長（資本の増大）過程が窺われる。同時に、サトベンの「正統な」子供（ヘン

サトベンの系図



* : 女性
 — : 正式な結婚
 ---- : 正式に結婚していない男女関係
 名前を網かけにした者は黒人（の血を持つ人物）であり、名前を白抜きにした者は語り手クウェンティンとシュリーヴに黒人とみなされる人物である。

リーとジューディス)が貨幣に換算されていることを裏付けていると言えよう。次の引用で「動産」という表記が意味するものは、主にサトベンが所有する奴隷である。また、ポンの母親が悪徳弁護士と手を組んでいるのは、サトベンとの離婚が正式に成立しておらず、彼がかつて話した別れる理由が納得できず、あくまで彼が妻子を捨てて逃げたと考えていることを示すものである。サトベンの資産に目を付けそれが増大するのを待って、離婚調停を金銭上有利に運ぼうとしていたらしい。「重婚のおそれ」が二十年後無くなったのは、彼女が復縁を諦めたのであり、28歳にもなるポンを大学へ遣りヘンリーに近づけ、更にジューディスと「近親相姦」をさせて、サトベンが自分を捨てた理由と同じ白い黒人が隠し持つ黒人の血で彼に復讐するという「陰謀」を企てる時期と符合する。

本日、サトベンは泥酔するインディアンより価額二万五千ドルの処女地百平方マイルを強奪。本日、最後の家屋建築用材を持ち沼地より上がる。価額、土地ともに四万ドル。本日、結婚するが重婚のおそれあり、すぐに現金化・換金できる買い手でないかぎり値引きゼロ(二度目の結婚が白人同士の等価交換だったことを意味する)。(先妻と繕いを戻す)見込み無し。疑いもなく即日新婦と同衾した。一年経過：息子ができる。実質価値=ありえないことだが売るとした場合の土地および家屋の公売価格プラス収穫高マイナス子供の取り分1/4。感情的価値=プラス百分の零倍プラス収穫高。十年経過：子供一人ないしそれ以上できる。実質価値=家屋および改良された土地の公売価格プラス動産マイナス子供達の取り分。感情的価値=子供各一人につき毎年百分増プラス実質価値プラス動産プラス労働によって得た信用。一娘一娘、娘、娘がいるのか？(301)

一八五九：二兄。一八六〇で二十年。年々実質価値の二百百分増プラス動産プラス既得の信用。推定価値=一八六〇年度十萬。問い一重婚のおそれ、有無。おそらく無し。近親相姦のおそれ、思うにあり。(310)

大学で弁護士の紹介状を介して出会った、十歳年上で都会の洗練さを身につけた金持ちのボンにヘンリーは心酔しきってしまい、休暇ごとにサトベン屋敷に誘うようになり、母エレンと共に後押しをしたため、やがてボンとジューディスが恋愛関係になってしまう。ポンは、顔のつくりが自分と似ていることでサトベンとヘンリーの正体に感付く。ポンは、近親相姦をサトベン一族の中に起こそうという母親ユーレイリアの邪悪な企みを実行に移す任務を課せられた操り人形であるが、自己の役目を認識していたものの最後の一线は守っていたと推測される。彼のジューディスへの恋愛感情は、まだ見ぬ父への愛を越えるものではなかったらしい。ポンはその優柔不断さで弁護士から罵倒されている。婚約が暗黙裡に既成事実化されているが、

ジューディスがやっと求婚の意味に解したのは、終戦間際にボンから届いた北軍から白墨を分捕ったという手紙である。

サトベンにとってボンの出現と彼の息子としての認知要求は、既往にさかのぼってデザインが依拠する差異の解消を強制することと同じ意味を持つ。ボンを息子と認めてしまえば、ヘンリーは兄ができて長男ではないことになる。純血の白人の息子であるヘンリーの優位性＝差異をこの期に及んで否定することになってしまう。したがって、あくまでも自分のデザインに固執するサトベンは、差異を存続させる（ヘンリーの長子相続権を守る）ため、絶対にボンを認知することはできない。デザインとボンの認知は互いにトレード・オフの関係にあるのだ。サトベンは、三十年前に自分で名付けたうえ、正嫡ではないのでサトベンの名字を与えず、「善(Good)の意味のフランス語ボン」(265)と区別してから捨てたはずの実子の存在に脅かされた。そして、やむなくニュー・オーリアンズの先妻のもとへ秘密裡に出掛け、おそらくは金で始末をつけようとした。サトベンが命懸けで南北戦争に出征したのは、「リー將軍直筆の感謝状」を貰ったとはいえ、南部人としての名誉のためではなく、奴隷制度にその存立の基盤を置く自分の資本を守るためであった。家族愛、肉親の情愛などということには全く無関心で、自分にだけ分かるように認知のサインさえ得られれば黙って立ち去るというボンの心の叫びを無視し、その死にも平然としているサトベンは、道徳的に人間的に盲目で、死ぬまで自己の盲目さに気付かなかった。パラダイムの持つ、ものを見えなくさせる構造のせいである。頑迷固陋な資本家としてのサトベンは、それらを無視してデザインに盲従し、「利潤の獲得による貨幣の無限の自己増殖」⁽¹¹⁾ という目的に向かってひたすら邁進するのみである。彼にとっては、家族など単に収益を上げるための道具に過ぎないのだ。それは、デザインの圏内に蓄積される経済的財貨の次元にとどまっている。サトベンは、戦死を覚悟して、かつての密輸ルートで北軍の港湾封鎖をかいくぐり、自分と死んだ妻エレンの墓石を購入して一時帰郷する。その折、弁護士であったクウェンティンの祖父に自分の「一途な純情」という悩みを打ち明けている。ボンとジューディスの婚約によるデザインの危機から、過度の狼狽ぶりをあらわにする彼の、他人に弱みを見せる一度限りの人間的な局面ではある。しかし、「デザインの手落ちを見つけてもらうため」(267)と言いながらも、自己を正当化する言説に終始し、もはや現実的実効性を欠いたデザインを修正する気配すら無い彼は、まさに負のイノセンスの持ち主であると言えるだろう。

白人と黒人の混血は、黒人の血がいかに微量であろうとも、絶対に黒人即ち奴隷という範疇にしか入れられない。ボンの正体、即ちボンに黒人の血が流れているという「真実」を知っているサトベンにとって、ボンは外見上本物の白人と見せ掛け

て人を騙す「賈金」に過ぎないのである。これはボンという奇妙な名前が暗示している。Bon = good は信用できる、インチキでないという意味で、彼は本物のお金、良貨として通用する危険性を持った存在なのだ。人種の差異のボーダーを越境する者。ボンは自然的な（生物学的、法的な意味での）息子ではなく、白い皮膚という隠れ蓑・金めっきを被った「賈物」の息子である。ミス・ローザを除く3人の語り手は、「悪貨」ボンが「良貨」ヘンリー及びジューディスを、その悪魔的誘惑術によって墮落させていくという見解を持っている。彼らは、ボンとジューディスの婚約が恋愛によるものだとどうしても理解できないし、また認められない。クウェンティンとシュリーヴによるボンの意味付けをみると、サトベンの先妻が差し向けた復讐の手先として、「放蕩息子」「快樂主義者」「女」「猫」「怠惰」等、道徳的墮落性が強調されている。さらには、尋常な手段では父サトベンにどうしても認知され得ぬボンにとって残された唯一の方法——黒人の血を隠し、腹違いの妹と知りつつもジューディスと結婚してサトベンの義理の息子の地位を確保すること、を実行に移そうとしたと結論する。ボンの近親相姦の目論みは確信犯であると語られているのだ。読者は、語り手がボンを描写する際に持ち出す、やましい自我の隠蔽を目論む装置としての「無表情」「微笑と言えない微笑」というペルソナに注意するべきであろう。ヘンリーがボンを射殺したことは、黒人の血がサトベン家の子孫に侵入し蔓延すること、即ち「悪貨」の流通を未然に防いだという意味で語り手に正当化されている。しかしながら、これによってヘンリーは殺人犯、ジューディスは「未婚の寡婦」となって破滅することになる。これは「良貨」がいかに弱々しいものであるか、の例証でしかない。

敗戦後、何食わぬ顔で帰還したサトベンは、サトベン式資本主義の自動運動の言わば歯車「キャプスタン」(36)であったヘンリーの消滅という事態を受けて、荒廃した大農園再建のために奔走する。資本主義が存在していくためには、「常に新たな差異、新たな利潤の源泉としての差異を探し求めていかなければならない。それは、言わば永久運動的に運動せざるをえない、言葉の真の意味での「動態的」な経済機構に他ならない」⁽¹²⁾。もはや「運命の債権者の手が既に肩に掛かっている」

(182) 今、デザイン実現のためにサトベンは、同じ差異、白人の息子を求め続けるというシジフォスの神話に似た反復をするばかりである。ミス・ローザの語りによれば、彼は南北戦争後に戦前と同じような繁栄を取り戻せると思い込んでいた。しかし、敗戦という決定的段階を迎えても自らの流儀を型通りに踏襲することで、彼は怨嗟の的となる。ローザへの求婚、即ち白人の息子という利潤を先取りした契約の提案は、彼女に拒絶される。窮余の策として、ウオッシュの15歳の孫娘を、安物のリボンやビーズで誘惑し子供を産ませたところ、それは女の子であった。彼は、

最後の賭けであった白人の息子の獲得に失敗してしまう。そのうえに、ウォッシュの孫娘が産んだ女兒の認知を拒絶したこと（馬以下だと罵り人格を認めなかったこと）は、黒人＝非人間とみなされたボンの場合と同じことである。白人＝人間であることが否定され、愚弄されたことに逆上したウォッシュの手にかかり、サトベン は命脈を断たれる。南部の体制崩壊と時期を一にして、彼が完全無欠と信じてきたデザインは、モラルという捨象されていた障害に禍いされたのである。

こうしてサトベンのデザインは挫折し、ヘンリーも家系に黒人の血を一滴たりとも許さないという南部社会の掟に殉じてしまったことになる。サトベンの望み通りボンは死んで消えたが、サトベンの死後もボンの系譜（サン＝ヴァレリー＝ボンとジム・ボンド）は生き残る。不滅の白人の名門家系と大農園を築こうとしたサトベンの夢も空しく、皮肉にも黒人の血を引く子孫しか残らない。しかも、代を重ねるごとに女親から結婚を介して与えられる黒人の血をますます濃くしながら。サトベンの系図の彼を中心とした左右の対照、即ち右側の良い家系と左側の悪い家系は、まさに白人と黒人の差異のレトリック、アメリカの光と影をシンボリックに表している。

資本主義は単に一つの経済システムに終わらず、国家装置・文化・イデオロギーをも取り込んだ一大社会構成体として自己確立したものである。サトベン式資本主義は敗戦による危機に瀕しつつも、農園内ではいまだ強固な生命力を維持している。屋敷が、具体的人間を材料にして自発的に権力に服従する主体を生産する工場であることを以下に例証してみたい。ボンの息子で、母親のオクトルーン（黒人の血が八分の一の混血）から黒い血を否応なく受け継いでいるサン＝ヴァレリー＝ボンが、白いサトベン屋敷に引き取られる。十六分の一強の黒人の血を持つとはいえ、ニュー・オーリアンズの遊廓という環境では彼はまだ黒人ではなかった。全体が娼婦街の観を呈していたその都会から屋敷へ移動することは、彼の自足した世界観の中に制度や社会的表象による亀裂をもたらすことになった。そこで彼は「黒人」というレトリックと初めて遭遇した。「ニガーなどという言葉は少年には初耳だった」（198）。それは実体を欠いた記号のような浮遊性を見せながら、現実の力として彼の身体と自己意識を強烈に呪縛し始めたのである。黒人召使クライティが彼を四六時中「監視」し、彼は〈見られている〉ことを永続的に自覚する状態になる。監視されていることの内面化＝意識化こそが拘留されている者の服従を作り出すのであり、フーコーはこれを「権力の自動化」と呼ぶ。クライティは、一方では彼が黒人少年と遊ぶのを叱りとばし、他方では田畑での強制労働や衣食住すべてにわたって黒人同然の扱いをしている。これは白人と黒人の差異を強調し、強迫的に繰り返す結果となる。衣服は、「優美な小公子風の高価な服」から「ハムの子孫（黒人）が

着る、粗悪で不恰好なデニムの作業服」(196)へと替えられ、寝る場所は、ジューディスとクライティの間の簡易ベッドから屋根裏のわら布団へと自ら選んで変える。さらに、クライティは彼の体を洗ってやる際に「彼の肌にかすかに現われている黒人種の名残りを洗い落とそうとしているかのように、溢れる激情を抑えながら強くこすった」(198)。言葉や文字を媒介とせず、イメージを使って、或いは行為・習慣を通して、感性や無意識に訴えかけるような形で彼に送り届けられるこのメッセージは、まさにアルチュセールの言う「イデオロギーの呼び掛け」である。それは、彼にその存在の理想像を送り届け、その存在を社会的に認知していることを知らしめ、そうして社会機構の中にかからめとり、社会体制の維持と再生産に奉仕させることを企図している。しかし、外見上白人であるが故に、社会では白人として通用する彼は、メッセージを自己の経験として受け止め、それに全幅の信頼を寄せて「生きられた関係」へと変容させることができずに、混乱し自暴自棄な生き方をする。酒に酔っては「ニグロ」の一団と喧嘩を繰り返し、挙げ句の果てには「動物園にでもいそいな」「石炭のように真っ黒い猿のような」(205)「白痴」で純血の黒人女と「正式に結婚」し、ジューディスから僅かな土地を借りて奴隷小屋に住み着く。彼の「受難」の人生は、語り手に「ハムの子孫が演じる悲劇的な道化芝居」(196)と意味付けられている。喩えて言えば、白人が黒人に扮して歌い踊るミンストレル・ショウの舞台上、彼は終生ブラックフェイスを演じ続けたのである。この挿話は、個人の社会的な自己同一性という虚構性を照射すると共に、「人種」という曖昧な概念が、差異の分類のための客観的指標であるかのように自身を装う危険性を告発し、その無根拠性を鋭く浮かび上がらせる。

一年後「白痴」の息子ジム・ボンダが生まれる。ジムは外見上明らかな黒人で「悪貨」であることは明白なので、サトペンの曾孫ゆえに絆を意味するボンダと名が変化している。ここで「精神薄弱」が女親から遺伝したとされている点にも留意すべきである。「黒人の血」を持つ者と共に、精神薄弱者は増殖しては困る不適格者として排除されるべき存在であるという意味付けを、白人の語り手は読者との暗黙の諒解として行なう。ジムは、言わば二重のスティグマ⁽¹³⁾を背負った最悪の存在という訳である。優生学を連想させるこの論理は、語り手がボンの母親を何の根拠も無く偏執狂・狂人と断定したことと通底するものだ。彼女は人種の差異を不分明にする混交の実践者であり、純粋な白人家系に秘密裏に黒人の血を紛れ込ませる陰謀家であるとして一方的に糾弾された。彼女に雇っては「悪鬼」サトペンさえも不当に滅ぼされる犠牲者なのである。混血＝「雑種」の劣等性を自明とする白人のイデオロギーは、読者に排除の共犯となってくれることを当てにしながら自己正当化を主張するあまり、逆説的にその欺瞞性と権力への志向性をあらわにしている。

サトペンの系図の実態の中には、「悪貨」が「良貨」を駆逐するというグレシャムの法則が働いている。排除されるべき不適格者の侵入と増殖により、白人の名家は崩壊し、無垢な2人の白人の子どもも墮落させられる。贖物・贖金だけが跳梁跋扈する悪夢のような世界である。サトペン家の物語は、人間関係の織物が紡がれる形をとりながら、経済学ならぬ文学的なグレシャムの法則の物語になっている。本物が贖物になっていくばかりでなく、贖物が影響力を増して本物を駆逐して、本物（であると信じられているもの）のシステム（家族の秩序）の存在が許されなくなる、という筋立てが浮かび上がってくる。ジュディスの死と共に、サトペンの白い大邸宅も幽霊屋敷同然となり完全に解体する。それは古き良き世界の崩壊の縮小模型である。新たな別の時代が到来したのである。それは贖金の時代、あるいは贖金が本物と区別できない時代である。

サトペン屋敷が焼け落ちた後に残されたサトペンの血を引く子孫は、ジム・ボンドだけである。小説末尾のジムについてのシュリーヴの不可思議な予言、即ちジム（の同類）が西半球を征服し、二三千年後には白人のシュリーヴも黒人のアフリカの王様の息子として生まれたことになっているだろうという予言は、人種の根絶のアレゴリーではない。ましてや、シュリーヴがヒューマニストを標榜して、サトペンのデザインの消滅は必然だと言っているのでもない。シュリーヴは、自分の子孫が混血化することを諧謔的に語りながらも、それはクウェンティンに対する、差異そのものの死を意味する混血＝雑種の増加による、白人たる自己の消滅の恐怖に訴えるブラック・ユーモアになっている。更に、「白くなって雪の中で目立たなくなってもジム・ボンドであることに変わりないさ」という台詞で、既存の階級構造の再生産が未来においても確実なこと（支配的イデオロギーの温存）を指摘している。同時に、それはサトペン式資本主義が単なる個人的企てではなく、社会的な構築物、白人中心社会のイデオロギーの所産であることを示唆している。彼の多分に自嘲気味な、白人のレトリックに対する風刺は、カナダ人だからこそ可能であったと言えよう。一方、クウェンティンの「南部を憎んでいない」という最後の叫びは、あくまで南部人としての自己省察を拒絶しようとする頑なな態度である。だが、「全然憎んでいない」と連呼することは、人種差別主義者の心理的屈折が当人に与える影響について、何よりも雄弁に物語っているのである。

このテキストは、南北戦争が終結して四十五年を経た二十世紀の現時点に生きている身である語り手が、意識的にサトペンのデザイン崇拜の非現実性を論難する半面において、支配階級の白人のイデオロギーを無意識に当然の前提にしておくという、一種の自家撞着に陥っているさまを読者に暴露し、綿密な吟味を迫るのである。論理の杓子定規的な適用が、「強者の論理」の社会的弱者・被抑圧者への押しつけ

を正当化する危険性を告発すると共に、いかなる政治的バイアスをも伴わない完全に中立的な立場など所詮この世に存在し得ないことを自ら証明している。「黒人の血」という不可視でまるで実体の無いスティグマ、それがあつた者を排除・攻撃の対象とする常人（白人）の論理（殺人事件の謎解きの行為そのもの）の不合理性・欺瞞性を読者に鮮明に刻印するのである。「たった一滴の黒人の血」「十六分の一の黒人の血」という表現は、混血全てを黒人に分類する不合理な取り決めに対する単なる揶揄ではない。それはレトリックがレトリックであることに注意を喚起する、あるいは抑圧されていたレトリック性を露呈させるという意味で、メタ・レトリック的であると言える。白人の血の純潔さと対置されることによって、それは性的な恐怖や欲望を喚起し、差異が存在しないか極小である場合に、固定した主な差異を確立するのに極めて有用である。「黒人の血」のフェティシズム化は、黒人と白人という差異のレトリックを無化するためにフォークナーが用いる言語上の戦略であり、それによって彼は、同時代の社会的表象と切り結び、アフリカ系アメリカ人の重要性を描いているのである。

註

- (1) Joseph Blotner ed., *The Selected Letters of William Faulkner* (New York: Random House, 1977) 78-79, 94.
- (2) Frederick L. Gwynn and Joseph Blotner eds., *Faulkner in the University* (New York: Random House, 1965) 71.
- (3) William Faulkner, *Absalom, Absalom!* (New York: Random House, 1936) 62. 以下、引用は本文中に頁数のみ括弧内に示す。
- (4) タイドウォーター景気とは、大西洋沿岸地帯、主に早くから開けたヴァージニア、カロライナ、ジョージアの海岸地方において、特にヴァージニアのプランターが、独立戦争後半世紀の間に七人の大統領を送り出して「ヴァージニア王朝」の異名を取った程の隆盛を誇つたことを指す。
- (5) 岩井克人、『ヴェニス商人の資本論』（筑摩書房、1985年）50頁。
- (6) 同前、18頁。
- (7) 資本主義の発展の自己運動の手口について、ケインズは次のような比喩を用いて述べている。ある教授が仕立屋に借金をしており、仕立屋が取り立てに来ると教授は言う。「もう一年待ってそれを二倍にしたいと思わないか。そうしたらどんなに金持ちになれるか考えてみたまえ」。一年後仕立屋が来ても教授は同じことを言うだろう。仕立屋の方からすれば、資金の回収を未来に先送りすればするほどよい。それをケインズはこのように言う。「彼が可愛がろうとしているのは、自分の猫ではなく、その子猫、否その子猫

の子猫…というふうには、猫族の果てるまで永遠に求め続けていくのである」。無論、猫とは元手となる資金、子猫は利子である。J.M. ケインズ、『わが孫たちの経済的可能性』（『説得論集』宮崎義一訳に所収、東洋経済新報社、1981年）を参照。

- (8) 『ヴェニスの商人の資本論』50頁。「差異」概念を視軸にして、剰余価値・利潤をより広い概念に再構成しようとする同書の試みにおいては、商業利潤は遠隔地市場間の価値体系の差異から、そしてマルクスの意味での剰余価値は内なる遠隔地—労働者階級との価値体系の差異から説明される。更に技術革新を基礎にしたシュムペーターの利潤理論も、未来の価値体系と現在の価値体系との差異から捉えられる。
- (9) 生産手段を独占している資本家が、労働力の価値と労働の生産物の価値との間の差異を媒介にして利潤を生み出す経済機構である、いわゆる産業革命以降に確立した産業資本主義と、奴隷制大農園経営とは、同一の構制になっている。近代資本制経営は、剰余価値＝無償労働を隠蔽する機構を作り出したに過ぎない。マルクスは、奴隷と賃労働者の形式的な相違性（人格の平等や労働力の維持の様式）にもかかわらず、実質的な関係においては資本家階級に包摂され、強制労働・剰余労働の搾取・隷従等、共通の構制になっていることに止目して、資本制的労働制も一種の奴隷制であることを指摘すべく「賃金奴隷制」（つまり、労働力商品の等価交換という自由対等な経済的・法的関係に媒介された奴隷制）とそれを呼んでいる。K.H. マルクス、『ゴータ綱領批判』（『マルクスの政治思想』渡辺寛訳に所収、河出書房新社、1962年）を参照。
- (10) 林文代氏は『ヴェニスの商人の資本論』を援用しながら、「サトベンのデザインは白人と黒人の差異を前提として初めて成立する」とし、デザイン実現のためには「白人＝優者、黒人＝劣者という二つの価値体系の間の差異という利潤が維持されていることが必要」と述べている。これは、岩井克人の言う「二つの価値体系の間の差異」を、二つの人種の差異の意味に解している。奴隷制大農園経営について前述したように、岩井説は、奴隷と農園主の労資関係で捉えるべきである。「黒人と白人という二つの価値」と取違えた上に、人種の差異から利潤が生まれるという比喻では、混乱が生じるであろう。また、「利潤（差異）の獲得」「白人の息子という差異（利潤）」という表現からわかるように、どのように人種の差異を利潤にするのか言及せず、純粹に比喩的な意味にとどめている。林文代、『欲望のダイナミズム』（『文学アメリカ資本主義』に所収、南雲堂、1993年）。
- (11) 『ヴェニスの商人の資本論』50頁。
- (12) 同前、59頁。
- (13) アーヴィング・ゴフマン、『スティグマの社会学』石黒毅訳（せりか書房、1963年）。